

# 思いを託すことのできる人財の育成



## 上村みどり

帝人ファーマ(株)生物医学総合研究所  
[191-8512] 日野市旭が丘4-3-2  
上席研究員, 理学博士.  
専門は構造生物学, Structure Based Drug Design,  
X線結晶学.  
m.kamimura@teijin.co.jp

[www.teijin-pharma.co.jp/index.html](http://www.teijin-pharma.co.jp/index.html)

私は、大学院で学んだ専門を活かし会社の創薬部門で仕事をできた幸せ者である。このような幸せなことは企業ではそう多くない事例ではないかと思う。本人の力量というよりは、アカデミア技術の産業界への波及タイミングと会社側のニーズではないかと思う。最近、堀江貴文氏が「好きなことだけで生きていく」という本をだしたが、彼が言いたいのは「これからは好きなことを極めたやつしか仕事なくなる」という意味らしく、思う存分自分を発揮でき、ほかの研究者とのディスカッションを通じてまた新たな発想になり、結果として、有用な新薬として患者さんの治癒につながるようにベクトルが向いているとなれば、なおさらやりがいを感じる。最近、さまざまな社会要請もあり、企業での残業に対して、年々厳しく制限される傾向である。しかし、一日も早く、患者さんに対して、役立つ薬を届けるためには、できるかぎりのスピードで研究を進めたいというのが本音であろう。無理はいけないが、意志と情熱なきところには、新薬はありえないと考えているし、新しい製品を生み出すということは薬に限らずそういうものかもしれない。そういう意味で、35歳のとき、主人と幼い3歳の長男を連れて、米国サンディエゴのラホヤにあるスクリプス研究所に会社から留学させていただけたことが、自分の人生の価値観を決めることになった。

青い海と明るい太陽は、少々の実験の失敗などくとどうってということないと思える気候であり、加えて毎日各departmentで数本ずつ開催される刺激的な講演会は、ネーチャーやサイエンスにアクセプトされたばかりでの講演が多く、実験の合間に梯子して聞き、まさに理想の研究生活を過ごすことができた。一方、過去にノーベル賞受賞者でも、面白くないと聴衆が一人二人と減っていき、講演会場が閑散となるシビアさには驚いた。主人は、臨床に近い研究室で、私は、Department of Molecular BiologyでIan Wilson博士の下で、HIV pg120の抗体の結晶解析を実施した。その当時の研究室は、世界各国からポスドクが来ていて、年齢も近く女性研究者も多かったので週末というと一緒に家族ぐるみで遊びに行ったり、遊ぶ場所は事欠かなかった。また、子供が終日通うEastgate Christian Schoolと

いうキンダーガーデンの行事も多く、親のボランティアで子供たちを連れていったBalboa parkの人形劇などは本当に楽しかった。朝から晩までここでお世話になっていたせいで、英語がまったく話せなかった息子は、帰国時には両親をはるかに上回る英語力をものにしていったのは言うまでもない。仕事するときはするが、楽しむときは楽しむというメリハリのある暮らし方がとても新鮮であった。いまでも、サンディエゴの当時の友人の家に行くと、立派に成長した子供たちもいっしょに歓待してくれる。また、帰国後も日本スクリプス会というのがあり、東西で年に一度、四年に一度は東西合同での会合があり、大学も会社も老いも若きも、同窓会のように話ができるのは、まさに留学のおかげかと思う。貴重な情報も人脈という縁を通じて初めて共有できるというものである。

話は変わるが、私は、小学生から大相撲が大好きで、今は、稀勢の里の後援会に入っている。最頂の力士が番付を上げていくさまを見るのは、まさにファン冥利につける幸せであるが、何より印象的だったのは先代鳴門親方が亡くなった後、親方の繰り返し言っていたことが思い出されたと、横綱昇進のインタビューで明言している点である。こういうときは親方だったらなんて言うか？ 亡くなった後にも、それをいつも考えて自分で判断できるようにしていれば、どんなにつらくとも耐えられたと話しているのが印象的であった。研究においては、とりわけ企業においては、さまざまな専門の研究者が協働して初めて一つのプロジェクトの成果に結びつくものであるが、それぞれの領域で、自分の思いを託せる部下を選別し、同じように繰り返し思いを伝える意義を考えている。思いとは何か？ もちろん研究環境も、社会的な要請も時々刻々変わっている。多くの場合において、正解か不正解か結果が明確にはわからないままに、判断していかねばならない。そこに至る過程は、経験を積むことによって若いときにはっきりしなかったことが「実はこういうことだったのね」と後年、納得することが増えるにつれて、繰り返し思いを伝えることの意義を考える今日この頃である。周囲を見回せば、必ず、思いを託せる人財がいるはずだから。